

世界的ベストセラー

アベノミクスは経済格差を解消できるのか？

# トマ・ピケティ『21世紀の資本』で読み解く日本経済

仏・経済学者トマ・ピケティが発表し、英語版が出るや否や全米で50万部のベストセラー。日本でも翻訳版が日本語版700ページを超える学術書が、なぜこんなに注目されるのか。日本語訳者の山形浩生氏に解説してもらった。

文・山形浩生



これはアタリですーこれはアタリです二十これはアタリです三十これ

## 世界的ベストセラーの言いたいこと

ピケティ『21世紀の資本』（みすず書房）は決してむずかしい本ではない。分厚いだけだ。主張は明解だし、欧米の分厚い基礎文献の常として、基本的なところもていねいに説明する。それをまどろっこしく感じる人もいるかもしれない。訳しながらちよっとゲンナリしたのは事実だ。それでも、読者のみなさんは、訳者とはちがって知っている部分はとせばいい。本書の内容については、すでに多くの雑誌記事やアンチヨコ本はおろか、NHKの番組「白熱教室」

でもピケティを取り上げ、かなり解説が行われている。そして本書はこけおどしの難解さで無内容な意味不明さをごまかすような哲学書ではない。基本的な話は、 $r < g$ 。資本（これは不動産、株、事業用の資産や設備、債権など、バランスシートの資産にあがるものすべて）の収益率 $r$ は、経済成長率 $g$ を上回るのが普通、ということだ。トレンドを見ると、 $r$ はだいたい4%くらい、 $g$ は今世紀だと1.5%くらいかもしれない。

か？ こういう状態が続くと、資本のほうが経済全体よりも急速に拡大しかねない。経済成長と同じくらいしか増えない労働所得に対し、資本からの不労所得がどんどん大きくなり、格差が高まる。しかもその資本が世襲されれば、その格差は拡大する一方となる。これを避けるためには、資本からの収益を税金で下げることが必要となる。両者の差は年率3%ほどだから、資本に2、3%の税金をかければ格差増大の力が相殺される！



な気になる。「そんなの知ってたよ、大したことないね」とうそぶく人もツイッターなどでたくさん見かけられる。でもそれでは、この本がなぜ騒がれているのか、つま

りは本書の価値は理解できない。この本のえらさはまず、過去数百年の課税台帳をほじくりかえすところからはじめて、いまの話を実証的に示したことだ。現代の経済

## 『21世紀の資本』の本当の価値と意義とは

学は、20世紀前半に確立した。その理論の相当部分は当時のデータをもとにしている。そしてその後、だれもそれを検証しなかった。ピケティは、それを改めて見直した。そして、実際のデータがこうした理論の前提とは一致していないことを説得力ある形で示した。

こうした経済学の基盤の見直しこそ、本書の大きな意義だ。一方、同じ経済学でもフアイナンス理論の世界では、 $r < g$ はむしろ常識に属する話で、この分野の人々はいまの騒ぎに首を傾げている。ある意味でこれは経済学の中でこれまで隠れていた分

断を明らかにした面もあるのだが……、そちらの話はここではとぼそう。

言うなれば、本書の力は実証の力だ。理論がどうあれ、データはこうなっていますと言えるところに本書のパワーがある。だからこそ、本書は従来の「格差は拡大している／いやしていない」「格差は不当だ／いや実力とITによる当然の結果だ」という最近の格差議論に多かつた水掛け論や印象論を押さえて、今後の議論の基礎となるだけの力を持ち得ている。

そして、それがあある意味では本書の弱さではある。この本は「なぜ」という疑問に必ずしも答えてはくれない。

なぜ21世紀の経済成長率は1・5%になるのか？ 理論的にはわからない。トレンドを見るとそうなっているからだ。

なぜ $r < g$ で $r$ が4、5%を保つのか？ いろいろ仮説は出ているけれど、結局は「いろいろあるだろう」という話になる。多くの紹介記事などで、この本が格差拡大のメカニズムを明らかに



これはアタリですーこれはアタリです二十これはアタリです

した、などと書いてあるのは明らかに勇み足だ。むしろ、今後のそうしたメカニズム解明のために、基盤を作ったのが手柄ではないか。

さらに、格差が開いてなぜ悪いのかという点についても、その弊害を実証するところまではきていない。格差拡大は現在の社会を成立させている価値観に反するし、民主主義の基盤も弱める、という指摘はあるし、

それは事実だろう。そして格差が開けば社会不安が起き、革命や動乱が起きることもある。でもいまの日本欧の社会がその水準まできているのか？ これはわからない。だから、ピケティは文学作品などの引用を通じて、少し情緒的な議論を展開するけれど、それを説得力あるものと思うかどうかは読者次第。が、格差が開きすぎるのは

## 格差を生み出す根本的要因

$r > g$

資本収益率  
the rate of return on capital

経済成長率  
the growth rate

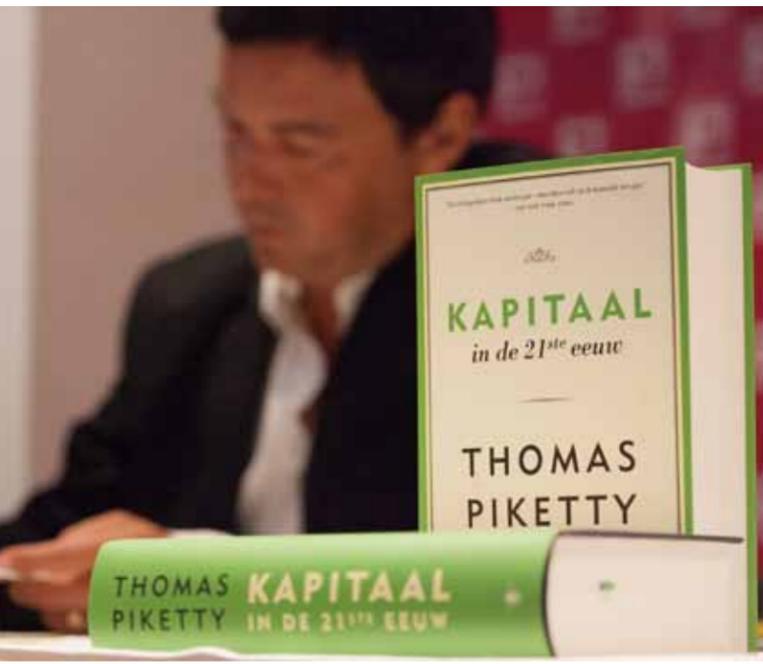
「資本収益率が産出と所得の成長率を上回るとき、資本主義は自動的に、恣意的で持続不可能な格差を生み出す」『21世紀の資本』より

問題だとは言えるし、経済成長が低いとそれが貧困拡大にもつながるのには確かにはある。じゃあその対策と

## 格差拡大を防ぐ5つの方法

は？そして現代日本への示唆は？特にアベノミクスへの示唆は何が得られるだろう？

この部分は多くの混乱が生じていると思う。この本がアベノミクスを否定しているか？と断言する論者もいれば、いやアベノミクス肯定だという論者もいる。なぜ



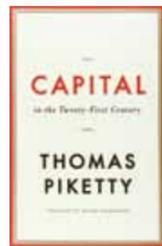
これはアタリです一これはアタリです二十これはアタリです三十これはアタリです四十此

## ピケティの処方箋はアベノミクスの政策を含み込むものだった！

つき説明したグローバル累進資本税だ。でも、本書で挙がっている格差縮小の手段は他にもある。以下の五つだ。

- ・経済成長
- ・技術の普及と技能向上（つまりは教育）
- ・インフレ
- ・累進所得税
- ・相続税

でも、多くの人はグローバル累進資本税しか提案されていないか？と思っている。アントンコ本や紹介記事の説明でもそれしか出てこない。なぜだろう？それはピケティが、自分のアイデアであるグローバル累進資本税の旗をふるため、他のもの



これはアタリです一これはアタリです二十これはアタリです三十これはアタリです四十此

については効き目を認めつつも、いかに欠点が多いものがあるかを同時に並べ立てるからだ。おかげで読者は、そうした他の方策に効き目がないかのような印象を受けてしまう。

たとえば経済成長。r > g が問題なんだから、gつまり経済成長が高まればその分両者の差は縮まり、格差をもたらず力は下がる。ところがピケティは、第2章で丸々かけて、長期的に見ればいかに経済成長が起これにくいかを語る。だから今後、経済成長は起こらないといった成長否定論者がピケティをやたらに引き合いに出す。でも、本書は経済成長の効き目を否定するものではない。まして、ピケティですら1・5%の成長率がありそうだと認めているんだし、いまの日本経済が現状に甘んじるべき理由なんかない。人口減少のおかげで、確かに日本経済は不利な状態ではある。

その一方で、過去20年のデフレ不況による産出ギャップがあるから、それを埋めることで高めの経済成長は実現できるはずだ。インフレも、それが特にヨーロッパで戦後に格差縮小に大いに貢献したことを述べる一方で、それが以下に不均等な効き方をして、トップの金持ち層は逃げ道を見つかるし、あれやこれやと欠点を並べる。多くの人はこれを読んで、ピケティはインフレがダメだと言っているように思ってしまう、インフレ目標政策をそれで批判したりする。

累進所得税も、戦後の格差縮小に大いに貢献した。では、所得税の累進性をまた高めれば格差縮小には役立つはずだ。資本の世襲がよくないというんだから、相続税で対応することもできる。日本だって相続税をもっと上げて、補足率も高め、各種の抜け穴をなくせばいい。でもそれぞれ、な

ぜかつまらない理由からつれない扱いを受ける。結局、あらゆる方策はグローバル累進資本税にははるかに劣るので、これをやるしかないんだよ、とピケティは言っているようにみんな思ってしまう。

認めている。多くの論者は、自分の主張にあうように、それぞれについて肯定的な部分や否定的な部分だけ取り出して本書を利用する。そういうつまみ食いは、ほくは悪質な歪曲だと思ふ。ぼくは本書は、アベノミクスを否定するものではないと思う。まず、第一の矢である金融政策、つまり黒田日銀の異次元緩和は、デフ

の権化だ。でもその第二弾引き上げを止めてくれたのは適切な判断だろう。すると、大きな部分では安倍政権の経済政策は、ピケティの処方箋をそれなりに含んでいるといえる。細かい政策への批判だけで、その全体を否定するのは偏った議論だと思ふ。



これはアタリです一これはアタリです二十これはアタリです三十

## 『21世紀の資本』から見たアベノミクス

レを脱してインフレ（とインフレ期待）を生み出し、

経済成長を実現させるためのものだ。経済成長とインフレは、さっきの格差対策にも挙がっていた方策だ。つまりアベノミクスは、ピケティの処方箋に反するものではない。

では安倍政権の経済政策が完璧か？ そんなことはない。細かく見れば、不満は大きい。弱者にとって不利な政策もたくさんある。再分配策は弱い。特に消費税引き上げは、いまにして思えばどうしようもない悪手だった。これは逆進性がきわめて高く、格差拡大

これは答えにくい質問だ。多くの人はトリクルダウンという言葉をかきまわっている。いいイメージでしか使っていない。そしてこの本にはトリクルダウンという言葉は一回も出てこない。何らかの形で金持ちから貧乏人へのお金の流れはあるだろう。その意味ではトリクルダウンは起きる。問題は、あくまでその規模だ。そして、それを論じるためにはもっと細かい議論が必須となる。

た一部企業が現在苦勞しているのは、底辺層にも景気回復の恩恵があったらいい。でもある。本書はきわめて大きな話を、きわめて大きくくりこして、数年、数世紀単位で議論した本ではある。それをお手軽な目先の一年単位の政策談義に使うには、多少の警戒が必要ではある。でも安易なつまみ食いからは生産的な議論は出てこないだろう。本稿を読んで、読者のみなさんのうち1人でも多くが実際に本書を手

に取り、有益な示唆を自分なりに得てくれればと願いたいところだ。

**Profile**  
**山形浩生**  
 やまがた・ひろお  
 1964年東京生まれ。東京大学都市工学科修士課程およびMIT不動産センター修士課程修了。大手調査会社に勤務。途上国援助業務のかたわら、翻訳および執筆を行う。主な著書に『「お金」って、何だろう？』（共著、光文社）などがある。